

# 知的障害のある自閉症の年中児に対して、園全体で支援の在り方を検討し、本児の意思の表出を目指した事例

## 1. 事例の概要

A児は、幼稚園の年中児クラスに在籍している。自閉症の診断を受けており、知的な遅れがある。園内では一定の事柄に対するこだわりの行動、嫌な経験を引きずるといった様子も見られる。

園ではケースカンファレンスを行い、園全体でA児の様子について把握し、必要な支援が行えるよう体制を組んでいる。また、補助教員の支援により、クラスで他の幼児と同じ活動を楽しめるようにした。A児に発語がないことに疑問をもつクラスの幼児には、A児の保護者の同意を得て、クラス内でA児の困り感について話す機会を設けるなどして、A児への理解が深まるようになってきた。こうした支援のもとで、A児が主体的に活動に取り組もうとする姿がみられるようになった。

キーワード 自閉症、知的障害、発語

## 2. 幼児の実態

A児は幼稚園の年中組に在籍している。3歳半健診時に自閉症の診断を受け、靴箱の靴の出し入れにこだわる行動や、嫌な経験をすると思い出して泣くことを繰り返す様子もみられる。発達検査では知的な遅れがみられた。「あ」「う」などの声や、「いや」という声が聞かれるようになってきてはいるが、有意味語にはなっていない。また、保育者の手を握って引いたりする要求行動も少しずつみられている。他児が近づいてきたときには、同じ場にいることを拒むことはなく、共に同じ空間で遊びながら過ごしている。三輪車やカセットデッキなど自分の興味のある物を見つけてそれを使って遊ぶ姿もみられるようになったが、遊びと遊びの合間に保育者の靴箱の近くへ行き、保育者の靴を出したり入れたりするこだわり行動をとる姿がみられる。設定保育では、保育者がこれから行う活動の説明を始めた時に、理解できなかつたり興味がなかつたりすると、保育室を出て行くことがある。

## 3. 本事例に関する基礎的環境整備

- 園内でケースカンファレンスを行い、A児が園内で生活するに当たって不安のないよう、また必要な支援が行えるよう園内の体制を組んでいる。担任や副園長は、保護者との連絡を密に行い、家庭での様子と園での様子をつき合わせながら、より良い支援を行えるようにしている。【基礎1】
- 学期に1回の作業療法士（OT）、カウンセラー、合理的配慮協力員による園訪問・園児観察を行い、支援に役立てている。【基礎2】
- こだわりのみられた「靴箱の中の靴を出したり入れたりする」行動から、物事に対して自ら取り組みたいと言うA児の主体的な思いの育ちや手先の巧緻性を、

更なるA児の成長や達成感へと結びつけることができるように、靴箱に似せた箱に靴の絵が描かれている立体のパネルを出し入れする遊具を作製した。色だけではなくマークもそろえて縦方向と横方向の関係を意識しながら入れたりすることで、他の園児と関わりながら靴を出し入れすることを楽しむことができるという考えに基づいた工夫をした。【基礎4】

#### 4. 合意形成のプロセス

保護者は、A児が園で他児と一緒に集団生活を送ることを望んでいる。園としては、集団生活を送る中でA児の様子について保護者には適宜話をし、その都度、保護者と教員の間で現在のA児の姿、求める支援、今後の手立てについて確認してきた。

#### 5. 合理的配慮の実際

- 言葉で表現できないため、粘土やボール、積み木の写真が貼ってある意志伝達の絵カードを作成し、A児の思いを汲み取れるようにした。園内の遊具や保育室にある物を写真で表示し、A児とのコミュニケーションツールとなるようにした。【合理①-1-1】
- 他児と関わる時には、言葉で伝えられない分、教員が伝達し、本人の思いをクラス全体へ伝える機会をもった。【合理①-1-1】
- ボール遊びが好きであったので、例年よりもボール遊びに長い期間取り組めるようにした。【合理①-1-2】
- 初めての事や大きな音等でA児の混乱が予想されるときには、A児の場所を後ろの方へ配置したり、A児の隣で保育者が寄り添ったりした。【合理①-2-2】
- 他の幼児には、担任からA児が困っていることについて話し、A児への配慮へ気付かせるようにした。【合理②-2】

#### 6. 本事例の成果と課題

個別に丁寧にA児の興味関心に合わせながら働きかけることで、A児が活動に主体的に取り組もうとする姿がみられるようになってきている。また、一度保育室から出て集団から離れても、再び保育室に戻ろうとする姿から、集団での活動にも意識が高まってきていると考えられる。